

僕らの心に宿る光

ただの塾講師

# 目次

プロローグ	1
1 時間目 読み物「二通の手紙」	4
2 時間目 読み物「ネット将棋」	20
おまけ 七人のワークシート①	44

## プロローグ

ガラツと音を立てて扉が開く。先生が教壇に立つと、それまで少しざわついていた教室の空気がすつと澄んでいく。窓から差し込む温かな光は、生徒たちの真新しいノートを柔らかに照らしている。

「はい、じゃあ席について。これから道徳の授業が始まるけど、その前に、このクラスのだ徳の授業での、一番大事なルールの話をしようと思う」  
生徒たちの視線が、先生にまっすぐに集まる。

「みんな、道徳って一言で言うたら、何やと思う？」

突然の問いに、何人かが少し考え込むように首を傾げる。先生はその様子に優しく頷きながら、続けた。

「色々な答えがあると思うけど、道徳って一言で言うた『思いやり』のことやと僕は思う。互いのことを認め合い、想像し合って、自分も周りも、みんなが気持ちよく毎日を過ごせるようにする。それが、この授業で一番大切にしたいことや」  
先生は指を二本立てて見せる。

「そのために、この授業には大事な大前提が二つある。一つ目。人によって考え方は違うってこと。これから色んなテーマで話し合っていく中で、隣の席の子が自分とは違う意見を出してくれるかもしれない。それを『間違いや』って否定するんやなくて、『そんな考え方もあるんやな』って思っってほしいんや。『自分とは違う』ってのを認めることが、思いやりの第一歩やと思う」

先生の話に生徒たちは静かに頷く。

「そして二つ目。道徳に、数学みたいな『模範解答』はない。たった一つの絶対的な答えなんて、道徳にはないんや。たとえば、満員電車でお年寄りが乗ってきたら『席を譲ったほうが良さそう』って思っかもしれない。『でも、ほんまにその人は譲られて嬉しいんやろうか』『満員電車で席を立てて譲るのは、周りに迷惑をかけへんやろうか』……そういったことを考えたら、『譲らない』っていう判断が最適解になることもあるのが分かると思う。みんなには、この授業でいろんな考えを深掘りして、場面に合わせた『最適解』を見つける力をつけてほしい。」

「だから、考え方の違いを恐れんと、安心して自分の言葉で話してな。みんなの意見聞けるのを、先生は楽しみにしてるで」

優しい沈黙の中に、授業開始を告げるチャイムが響き渡る。

## 1 時間目 読み物 「二通の手紙」

「はい、では道德の授業を始めていきます。お願いします」

先生の言葉に生徒たちは立ち上がり、頭を下げる。

「お願いします」

凜とした、それでいて温かな声が教室に満ちた。

「今日は『二通の手紙』っていう読み物でいろいろ考えていこう」

先生はそう言うと、教科書を開くよう促した。

「教科書の140ページ開いてくれる？ まず僕が読んでいくから、カギになりそう

なところに印をつけたりしながら確認してな。『二通の手紙』」

先生の落ち着いた声が、物語を紡ぎ始める。規則、優しさ、そして二通の手紙をめぐる、ある動物園の入園係の話だ。

物語が終盤に差し掛かったとき、一番最初に、小さく息をのんだのは陽奈だった。明るい彼女の表情が曇り、隣の席の美緒の袖をくいと引く。

「ねえ……元さん、かわいいそうじゃない……？」

ささやかれた美緒は、悲しそうな顔でこくと頷いた。

「うん……なんだか、切ないね……」

一方、物静かな大輝は、黙って教科書の挿絵をじっと見つめている。彼は指でそっと、感謝の手紙をなぞった。そして、少し離れた席では、拓也が「うーん……」と考え込むように腕を組んでいる。その表情は、納得のいかないような、複雑な色を浮かべていた。

先生が教科書を閉じ、ゆっくりと生徒たちを見渡した。

「そうやなあ、まずはお話の感想を聞いてみようかな。誰でも思ったこと自由に言ってみて」

その言葉に、生徒たちは少し顔を見合わせ、誰が話すかを探り合っている。静寂を破って、ぱっと手を挙げたのは陽奈だった。

「はい！ あの、なんか、元さんが可哀想だなんて思いました。だって、困ってる姉弟を助けてあげただけなのに、停職になっちゃうなんてひどいと思います。お母さん、あんなに感謝してたのに……」

陽奈の言葉に、隣の美緒が優しく頷きながら、それに続ける。

「私も……そう思う。お母さんからのお手紙はすごく温かいのに、もう一通の『懲

戒処分』っていう手紙はすごく冷たくて……。二つが並んでいるのを想像したら、なんだか胸が苦しくなりました」

二人の意見に共感の空気が流れる中、腕を組んでいた拓也が、少し違う角度から口を開いた。

「うーん……。でも、元さんが園の規則を破ったのは事実だよな。もし、あの子たちが池で事故にでも遭ってたら、もっと大変なことになってたわけで……。だから、動物園が処分するっていう判断も、分からなくはないかなって。……でも、そう思うと、感謝の手紙があるから、すごい複雑な気持ちになる……」

拓也の現実的な言葉に、教室が少し静かになる。みんながその言葉の意味を考えていると、今まで黙って話を聞いていた大輝が、ぽつりとつぶやいた。

「……元さん、最後は『晴れ晴れとした顔』だったんだ……。なんで、あんな顔になれたんだろうって……。それが一番気になりました」

「おっしゃ、みんな発表ありがとうな。うん、なんか切なくなるよな。あとでみんなでじっくり考えてみよか」

先生は一人ひとりの意見を受け止め、優しく頷いた。

「じゃあ、内容を前から一個ずつ見ていってみよう。……ここでは『規則』ってのが



ポイントになってきそうやな。そして、この二人の考え方、どっちが正しいってわけではない。ともに信念に基づく行動だから。でもここでは、その行動の『善悪』ではなく、『規則に従うこと』に焦点を当ててお話を解きほぐしていこう」

先生がこの時間のテーマをはっきりと示すと、生徒たちの間にわずかな変化が起きた。拓也はそれまで組んでいた腕をほだき、少し身を乗り出したように見える。

「規則」という、より具体的なテーマに興味を引かれたようだ。

「回想の場面に行ってみよう。……この場面、行動としては『入れてあげる』『帰す』の二通りある。自分ならどっちの行動をとるか、考えを言ってみてか」

「自分ならどうするか」という問いに、教室は自分事として考えるための静けさに包まれる。

一番に「はい！」と手を挙げたのは、やはり陽奈だった。

「私は、絶対に入れてあげます！　だって、弟の誕生日なんでしょ？　それなのに泣きそうな顔してたら、可哀想すぎるもん。規則も大事かもしれないけど、それで子どもの誕生日を台無しにするのは、なんか違う気がする！」

美緒も、陽奈に同意するように、でも静かに話し始める。

「私も、入れてあげると思います……。女の子が、入園料をぎゅっと握りしめて

たって書いてあったし……。その子の『弟に見せてあげたい』っていう優しい気持ちを考えたら、規則だからって断るのは、私にはできないかも……」

二人が「入れてあげる」という意見を述べた後、拓也が、少し難しい顔をしながら口を開いた。

「俺は……規則通り、帰すと思う。……気持ちは分かるけど、結果的に元さんは停職処分になってる。それに、子どもたちも園の中で迷子になって、大騒ぎになったわけだし。その場の優しさが、後でもっと大きな迷惑とか、もしかしたら事故に繋がったかもしれない。そう考えると、やっぱり決められた規則には従うべきなんじゃないかな」

拓也の意見に、陽奈や美緒は少し複雑な表情をしている。最後に、ずっと黙って考えていた大輝が、ゆっくりと顔を上げた。

「……どっちが正しいかは、分からないです。でも、元さんは何日もあの子たちの様子を見てた。ただの『お客さん』じゃなかったんだと思う。だから、『規則』よりも目の前の二人の気持ちを優先した……。自分だったら、その場でどっちの判断ができるか……。自信がないです」

「みんなそれぞれ良い意見言うてくれたな。特に大輝くん。『その場で判断できる自

信がない』ってのも立派な意見や。難しいもんな」

先生は、佐々木さんの立場が過去と現在で変わったことに触れ、考えは変わっていくものだと付け加えた。その指摘に、拓也がハッとした表情で口を開く。

「ああ、なるほど……。佐々木さんは、元さんの『事件』を全部見てたから……。優しい気持ちで規則を破った結果、元さんが停職になって、大騒ぎになったのを知ってる。だから、今の佐々木さんは、数年前とは違って『帰す』立場になったってことか……」

拓也の言葉に、陽奈や美緒も「そっか……」と、佐々木さんへの印象が変わり始めていくようだ。

「そうやな。佐々木さんの立場が変わったのは『事件』に遭遇したからや。『事件』の始まりは、元さんが規則を破ったとこやったな。ほなら、元さんが破った規則ってなんやったっけ？」

先生が尋ねると、拓也がすぐに手を挙げた。

「はい。二つあると思います。一つは、『入園時間が過ぎていたこと』。もう一つは、『小学生以下の子供は、保護者同伴でなければならないこと』です」

「そうやな、元さん、一つどころか二つも規則破ってもうたんや。……これによっ

て『失踪』っていう事件が起こったわけで、事故につながる可能性もあったんやな。どんな事故が想定できる？」

先生が「どんな事故が想定できる？」と尋ねると、教室の空気が少し引き締まった。

「はい。……もし、池に落ちておぼれていたら、と一番に思いました。閉園後で誰もいないから、誰も助けられない状況だったと思います」

拓也の言葉に、陽奈も顔をこわばらせて続ける。

「危ない動物の檻に近づいちゃって、もし手の中に入れて噛まれたりしたら……とか！ 暗くてよく見えなかったりしたら、危ない！」

美緒は、二人の身体的な危険とは少し違う視点から、おびえるように言った。

「それに、どんどん暗くなって帰り道も分からなくなってしまう……。見つからなかったら、二人だけで夜を過ごすことになったかもしれないって思うと……すごく怖かったんじゃないかなって……」

考えれば考えるほど浮かび上がる危険な可能性に、生徒たちは皆、こわばった表情で深く頷いている。教室全体が、「規則」とは、ただ人を締め出す冷たいものではなく、皆を守るためにあるのかもしれない、という空気に包まれ始めた。

「じゃあ、言語化してみよう。……『規則ってなんのためにあるんだろうか』」

授業の核心に迫る問いに、最初に手を挙げたのは、やはり拓也だった。

「はい。……さっきみんなで考えたみたいな、危ない事故が起きないようにするため、だと思っています。利用する人みんなが安全に過ごせるように、一番悪い結果を避けるためにあるのが、規則なんだと思います」

続いて、美緒が静かに言葉を添える。

「私も、拓也くんと似てます。みんなが悲しい気持ちや怖い思いをしないで、安心して楽しく過ごせるように……。そのためにあるのかなって思いました」

最後に、一番気持ちの変化が大きかった陽奈が、自分の発見を確認するように言った。

「……うん。私もそう思う。最初は、ただ厳しいだけって思ったけど……そうじゃなくて、みんなをちゃんと守るためにあるんだなって……。だから、規則を守ることで、本当は……優しいこと、なのかなって……思いました」

「みんな良い気付きや。ほなら、視点を変えてみよう。『規則は絶対に守らなければならぬものか』」

さっきの結論を揺さぶるような問いに、教室は再び深い思考の沈黙に包まれた。

「はい、僕は絶対だと思います」

一貫して規則の重要性を説いてきた拓也が、きっぱりと言った。

「もし『この場合は守らなくてもいい』っていう例外を一度でも認めたら、規則はどんどん意味がなくなっていくと思うから。みんなを平等に、安全に守るためには、誰にとっても絶対であるべきだと思います」

その明確な意見に対し、陽奈はとても困った顔で首をひねる。

「ええー……難しい……。さっき規則を守るのが優しさだっと思ったけど……。でも、元さんが規則を破ったのも、あの子たちにとっては優しさだったし……。うーん……。『絶対』って言われると……。時と場合による、のかなあ……。？ わかりません……」

陽奈の葛藤を引き継ぐように、美緒が言葉を探しながら話す。

「基本的には守るべきだと思います。でも……。元さんは、あの子たちの事情を知ってたから、規則よりも気持ちを優先したんだと思うんです。規則だけでは判断できない、その人の心を考えなきゃいけないときも、もしかしたらあるのかもしれない……」

最後に、ずっと天井のあたりを見て考えていた大輝が、静かに、でもはっきりと

した口調で言った。

「……規則は、たぶん『みんな』のためにあって、元さんの優しさは、目の前の『二人』のためにあったんだと思います。……元さんは、『みんな』のための規則を破って、『一人』を選んだ。そして、その結果から逃げずに、全部自分で引き受けた……。だから……守らなくてもいいときもあるのかもしれないけど、それには、元さんみたいな『覚悟』が必要なんじゃないかと思います」

「みんなそれぞれ違うけど全部良い考えや。これまで僕は『AかBか』みたいな問いかけをしてたけど『答え』はないねん。同じく『絶対』もないんや。大輝くんは『自信がない』『覚悟が必要』みたいな第三の案を発表してくれた。これもめちゃくちゃ素晴らしい答えなんや。AでもBでもないCが答えになるときもある。これが道徳や」

先生が議論を優しく包み込むようにまとめると、生徒たちは安堵と納得が入り混じったような、穏やかな表情になる。

「最後、『罰』について考えて終わろうか。元さんは『懲戒処分』を受けた。これは一種の『罰』やな。『罰』ってなんのためにあるんやろうか」

最後の問いに、拓也が答える。

「規則を『ただの言葉』で終わらせないため、だと思います。もし規則を破っても罰がなかったら、誰も真剣に守らなくなる。だから、『これを破ったらこうなる』という結果を示すことで、社会の秩序を守るためにあるんだと思います」

「うーん……自分がやったことが、良くないことだったんだって、ちゃんと考えられるようにするため……かな？」

陽奈がそれに続く。美緒も、公平さや、間違いを示す意味があるのではないかと意見を述べた。そして大輝が、自らの言葉で締めくくった。

「……元さんは、罰を受けることも覚悟の一部だったんだと思います。だから、罰は……自分がした選択の『責任』を、ちゃんと形として引き受けるためにあるんじゃないか、と思いました」

「ありがとう。みんなしっかり考えて言葉にしてくれたな」

先生は満足そうに頷き、自身の考えを静かに語り始めた。

「僕は『罰』は『許し』への準備やと考えてる。許すために罰する。罰することで機会を与えてる。そう思うな」

その言葉に、生徒たちはハッとして顔を上げた。大輝は目を見開き、先生の言葉を深く味わうように聞いている。「責任」の先に「許し」があるという考えが、彼



の中で大きな意味を持ったようだ。

先生が授業のまとめを黒板に書くように一つずつ読み上げ、感想を書くよう指示すると、教室にはカリカリという鉛筆の音だけが響いた。

授業の終わりを誰もが意識したその時、先生がふいに言った。

「よっしゃみんな書けたみたいやな。授業時間が10分くらい残ったから、最後に追加で訊くわな。お母さんからの手紙の内容について、みんなどう思う？」

追加の問いに、生徒たちは少し驚きながらも、すぐにまた思考の世界に戻っていく。

「はい……。すごく切ない手紙だなんて思いました」

一番に口を開いたのは美緒だった。続いて陽奈が、少し興奮したように付け加える。

「私は、この手紙を読んだら、やっぱり元さんがしたことは間違ってたんだって思いました！こんなに喜んでもらえてるのに、どうして罰を受けなきゃいけないんだろうって、もっと分からなくなりました」

二人の意見を聞いていた拓也が冷静に分析し、最後に大輝が「『あの子たちの夢を大切に思ってください』っていう言葉が、一番心に残りました」と、一つの言葉

を拾い上げた。

生徒たちの共感的な意見が出揃ったところで、先生が静かに、しかし鋭い一石を投じた。

「だいぶ意地悪に思われるかもしれへんけど、僕的には、『なんや、この文章。』って思った。もちろん、謝罪と感謝を入れてる点では十分な手紙かもしれへん。でも、この手紙、読んだときに『温かい家庭像』が強く印象に残らへん？ 『動物園での迷惑への謝罪』が『楽しそうな家庭での様子』にかき消されている感じ。……もつと言うと、僕には『言い訳と感動』の手紙にすら見えてしまう。これって、もうちょっと伝え方が工夫できるんじゃないかな」

教室の空気が一変した。陽奈と美緒は、戸惑いを隠せないでいる。そんな中、この新しい視点に最初に食いついたのは拓也だった。

「なるほど……。『温かい家庭』を強調することで、元さんがしたことの『正当性』をアピールしてる、みたいな……。言われてみれば、確かにそういう読み方もできますね……」

しかし、大輝は少し違う考えを巡らせていたようだ。

「……僕は、意地悪だとは思いませんでした。お母さんにとっては、謝らなきゃい

けないっていう気持ちよりも、感謝を伝えたいっていう気持ちのほうが、ずっと大きかったんだと思います。……だから、自然と感謝の言葉のほうが多くなっただけじゃないかなって……」

生徒たちがそれぞれの考えを巡らせる中、先生は教科書を手に取り、手紙の最後の部分を少し変えて読んでみせた。

「……大変なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございませんでした。また、かけがえない思い出を作っていただき、本当にありがとうございました。……どうやるか。最後の文をいじっただけなんやけど、印象違ってこうへんかな？」

生徒たちは「ああ……」と、感嘆とも納得ともつかない声を漏らした。たった一行で、手紙の空気ががらりと変わったのを感じ取っている。

「わ、全然違います！『ごめんなさい！』と『ありがとう！』がちゃんと分かれてるから、すぐく分かりやすい！」

陽奈が目を丸くして言った。拓也も、その違いを分析的に指摘する。

「最後の最後に、もう一度はつきりと謝罪の言葉で締めることで、手紙全体の印象が引き締まりました。これなら、誰が読んでも言い訳だとは思われにくいですね」

そして最後に、大輝がこの変化の本質を静かに語った。

「……前の手紙は、元さんの心だけに向けた、個人的な手紙だったんだと思います。先生が直したこっちの手紙は、元さんだけでなく、動物園っていう『社会』にも向けた、公的な手紙になってる感じがします。……個人の気持ちと、社会的な責任の、両方のバランスが取れてる。……すごいと思いました」

「今日やったのは『規則と罰』についてやった。でも最後にやった『たった一文での印象の変化』についても頭の片隅に入れておいて。『伝えたいことを正しく伝える』ってのも道徳において必要になってくるからね。よし、ちょうど時間やな」  
先生のそのメッセージに、生徒たちは深く頷く。

「道徳の授業を終わります。ありがとうございます」

先生の挨拶に陽奈がはっとしたように顔を上げ、クラスの代表のように声を張った。

「起立！」

その声で、生徒たちが一斉に立ち上がる。そして、先生に向かって、深く、心のこもったお辞儀をした。

「ありがとうございます！」

顔を上げた生徒たちの表情は、50分前とは比べ物にならないほど、深く、そして  
晴れやかだった。

授業終了を告げるチャイムが静かに響いた。

## 2時間目 読み物「ネット将棋」一日目

生徒会での活動のため初回の授業を欠席した海渡が、わくわくした様子で陽奈に尋ねる。

「前回の道徳、どんなことしたん？」

「『二通の手紙』っていうお話で、規則を守ることについて考えたよ。いろんな意見が出たんだけど、先生はどの意見も大事にしてくれて、自分の意見が発表しやすかった！」

陽奈の言葉に美緒が静かに頷く。それを横で聞いていた竜二が鼻で笑う。

「どうせ、どいつも一緒だろ。みんな綺麗事ばっか言いやがるんだ。道徳の授業なんて退屈だから、前も保健室でサボってやったんだよ」

「くに先生の授業、退屈じゃなかったけど……」

大輝が呟くように漏らしたその言葉は、海渡の期待を膨らませた。

「おはよう！」

挨拶しながら先生が入ってくる。前回揃わなかった生徒たちが揃っているのを確

認して、先生は嬉しそうに話す。

「今日はみんな揃ってるな。前よりも多くの意見が聞けそうや。そうそう、せっかく揃ったし、僕のクラスでの道徳のルール、もう一回話しとくわな」

先生は、道徳とは何か、そして土台となる二つの大前提が何か、生徒たちと確認した。

「そうだ、咲さん。虹の端っこ探して学校サボってまで探検するのやめてな。心配したで。お家の人は『あの子のことだから、どこか探検してるんじゃないかな』って言うってはったけど」

先生の呆れたような、でもどこか面白がっているような注意に、咲は「えへへ」と笑った。悪びれている様子はないが、教室の空気は和む。

ほのぼのとした空気の中、授業開始のチャイムが鳴る。

「ほなやっていこ。道徳の授業を始めていきます。お願いします」

先生の挨拶に生徒たちは立ち上がり、声を揃える。

「お願いします」

「ほなら今日は28ページ開いて。『ネット将棋』ってお話使って考えて行こか」

先生の言葉で、生徒たちは一斉に教科書を開く。ガサガサとページのめくれる音

が教室に響いた。拓也や海渡は、すぐにページを開いて先生の方をまっすぐ見ている。陽奈の隣で、咲が「あ、ネット将棋だ。私、どうぶつタワーバトルならやったことあるよ」と小さくささやき、陽奈が「しーっ」と人差し指を口に当てた。竜二は、面倒くさそうに本を開くと、机に肘をついてつまらなそうな顔をしている。大輝と美緒は、静かに教科書のタイトルを見つめていた。

先生は咲のささやきに気づいて、小さく笑った。

「はは、どうぶつタワーバトルか。あれおもしろいよね」

先生はチョークを手を取った。

「よし、今日やっていくお話はちよつと登場人物多いから、名前の出てくる人たちを黒板に簡単にまとめとくね」

先生が物語を読み始めると、教室の空気は静かな集中に満たされた。主人公が敏和との対局で時間稼ぎをする場面では、竜二の口元に、少しだけ「分かってるぜ」と言いたげな笑みが浮かぶ。主人公がネット将棋で一方的に通信を切断する場面では、彼は小さく頷いた。一方、明子のソフトボールの話になると、陽奈や美緒は「あーあ……」というように、少し悲しそうな顔で聞き入っている。敏和が『負けました』って言うことで、力が伸びていく」と語る場面では、海渡や拓也が深く頷



き、大輝は何かを考えるように、じっと自分の指先を見つめていた。

範読が終わり、先生が問いかける。

「ほな、お話読んだ感想を聞いてみようかな。思ったこと自由に言ってみていいよ。物語の余韻が残った、少し重い沈黙が流れる。最初に咲が手を挙げた。

「はい！ ああ、わたし、どうぶつタワーバトルをネットですごく好きで、相手がすごい変な形のゾウを置いてきて絶対負けてしまうって思ったんですけど、そしたら急にラッコが一番上から降ってきて、奇跡的にバランスが取れて勝てたことがあって。それって将棋で言う『奇跡の一手』みたいな感じなのかなって思いました！」

すると、それを聞いて鼻で笑うように、竜二が口を挟んだ。

「でか、この話の主人公、別に普通じゃね？ 負けそうになったら時間稼ぎするとか、ネットでムカついたら通信切るとか、当たり前だろ。いちいち『負けました』とか言って頭下げる方がダセエわ。そんなに強くなるとか、ただの綺麗事。ウケる」

竜二の言葉に、陽奈がカッとなって反論する。

「え、そんなことないよ！ 私は、ソフトボールの明子さんの話が、すごく可哀想

だなんて思った……。最後のバッターになっちゃって、悔しくて挨拶もできなくなっちゃう気持ち、分かるもん……。それに、敏和くんは全然ダサくない！ すごく大人だなんて思った！」

空気が少しピリついたところで、海渡がまあまあと、なだめるように話し始めた。

「竜二の言うみたいに、主人公の気持ちも分からんでもないけどな。誰だって負けるのは恥ずかしいし、逃げたくなる。でも、敏和みたいに、その負けから何かを学ぼうとする姿勢も確かにある。その『逃げる弱さ』と『向き合う強さ』の両方が描かれているのが、この話のポイントなんじゃないかな」

拓也、美緒、大輝は、まだ発言せず、三者三様の意見を静かに聞いている。

先生は頷きながら、生徒たちの意見を受け止める。

「うんうん。勝ちたいって気持ちも分かるし、悔しくて挨拶できなくなるのも分かるわ。だって、誰も負けたくて対戦なんてせえへんもんな」

先生のその言葉に、少しピリついていた教室の空気が、ふっと和らいだ。挑発的だった竜二が、少し驚いたように先生の顔を見て、「だろ？」とでも言うように、強く一度頷く。自分の気持ちを分かってくれた、と感じたようだ。

「さて、このお話は『勝負』を軸に展開してたな。まずは『勝負』についていろいろ考えてみよか。みんなは勝負するの好き？」

先生の問いかけに陽奈が元氣よく答える。

「はい！ 好きです！ 試合とか、勝ったらめっちゃ嬉しいし、みんなで『やったー！』ってなるのが楽しいから！」

竜二が続く。

「勝つのは好きだな。相手をボコボコにして、どっちが上か思い知らせるのは気分いい。負ける勝負は時間の無駄だからやんねーけど」

拓也は冷静に答えた。

「勝つために作戦を考えたり、練習したりするのは好きです。自分の力がどれくらいか試せるので。でも、ただ運だけで決まるような勝負はあまり好きじゃないです」

海渡が笑顔で言う。

「俺も好きやで。本気でやり合うからこそ、終わった後に相手と仲良くなれたりするしな。お互い、ちょっと成長できる気がするから」

美緒は少し申し訳なさそうに言った。

「私は……あんまり好きじゃないです……。どちらかが勝って、どちらかが負けるっていうのが、なんだか悲しい気持ちになるので……。みんなで何かを作る方が好きです」

咲が楽しそうに話す。

「好きです！ どうぶつタワーバトルで、誰も思いつかないような変な動物の積み方ができてタワーがすごく芸術的になったときは、勝つと同じくらいいいなって思います！」

少し間を置いて、大輝が静かに言った。

「……あまり、考えたことないです。人と勝負するより、昨日できなかったことが、今日できるようになることのほうが、気になるので……」

先生はみんなの意見をまとめる。

「なるほどな。みんな考えは違ってるけど、『勝つ』とか『成長』っていうプラス面が大きそうやな。ほなら、負けたらどういう気持ちになる？ これは意見いろいろ出てきそうやな」

新たな問いかけに、竜二が吐き捨てるように答えた。

「は？ ムカつくだけだろ。時間の無駄だったって思うし、相手がズルしたんじゃ

ねえかって勘繰るわ。気に食わねえから、もう二度とそいつとはやんねえ」  
陽奈が悔しそうに言う。

「すっごい悔しいです！『めっちゃ練習したのにー！』ってなるし、自分のせいで負けちゃったら、チームのみんなに申し訳なくて、泣きそうになります」  
拓也と美緒もそれに続く。

「もちろん悔しいですけど、それよりも『なんで負けたんだろう』って原因を分析します。作戦が悪かったのか、練習が足りなかったのか……。そこが分からないと、次に勝てないので」

「やっぱり、悲しいです……。自分の力が足りなかったんだなって落ち込むし、相手にも、もっと良い勝負ができなくて申し訳ない気持ちになります……」

海渡は笑いながら話す。

「悔しいけど、半分は『やるな、相手』って感心するかな。完敗やったら、むしろスッキリするかも。『次は絶対勝ったる』って次の目標ができるから、それはそれで燃えるで」

大輝が静かに呟く。

「……腹は、立ちません。悔しい、というより……。できなかった自分に、がっか

ります」

みんなの意見を聞いた後、咲はあっけらかんと言った。

「負けちゃっても、あんまり気にならないです！ それよりも、さっきまで作ってたヘンテコな動物タワーが、ガラガラって崩れちゃうほうが『あー！』ってなります。でも、また最初から作れるから、それはそれで楽しいです！」

先生は一度、生徒たちを見渡した。

「『ムカつく』とか『悔しい』、『悲しい』、『申し訳なくなる』っていうマイナス面と、『次へのエネルギー』っていうプラス面がありそうやな。咲さんみたいに『あんまり気にならない』って人もいていいかもね。いま『プラス面』『マイナス面』って言うんだけど『良い面』『悪い面』ってわけじゃないからな。決してその感情が悪いわけではない。でも、陽奈さんとか美緒さんの言ってくれた『申し訳ない』って気持ちには、僕はもつ必要ないと思うよ。勝負なんて全力でやってたらそれでいいんやから。『手抜き』と『実力不足』は違うもんね」

陽奈と美緒は、ハッとした顔でお互いを見つめた。陽奈が戸惑いながら口を開く。

「え……そうなんですか？ でも、自分のせいで負けたら、やっぱり『ごめん！』っ

て思っちゃいます……。『手抜き』と『実力不足』は違う……。そっか……」

美緒は少し救われたように、ほっとした表情を浮かべた。

「『申し訳ない』って、思わなくていい……。そうか……。一生懸命やった結果なら、胸を張っていいってことなのかな……。なんだか、少しだけ気持ちが楽になりました」

その二人をフォローするように、海渡が力強く言う。

「先生の言う通りやで。お前らが全力でやって負けたなら、チームの誰も責めへんよ。むしろ『次がんばろうぜ』ってなるだけや。謝るより『悔しい！』って言うってくれる方が、周りもスッキリすると思うで」

拓也も、論理的に同意する。

「僕もそう思います。『手抜き』はプロセスの問題で、『実力不足』は現時点での結果の問題です。負けたときに反省すべきなのはプロセスであって、全力を出した結果について謝罪する必要はない。合理的だと思っています」

竜二は、腕を組んだまま、ふんと鼻を鳴らした。

「『実力不足』なら、ただ弱いっただけだろ。謝る必要はねえ。次に勝てばいいだけだ。……まあ、俺は負けねえけど」

先生は話題を少し戻した。

「勝ち負けについて考えたけど、そもそもみんなが考える『勝負の楽しさ』って何やろう。これも思ったこと自由に言っていってみて。美緒さんとかは『勝負が好きじゃない』って言うってくれてたけど、もし何か『こういうところは楽しいかも』みたいなのが思いつけば言ってみてか」

陽奈が目を輝かせて答える。

「やっぱり、勝った瞬間です！ 特に、ギリギリの試合で最後に逆転したときとかは、もう最高！ みんなで抱き合って喜ぶのが、一番楽しいです！」

竜二が不敵な笑みを浮かべて言う。

「相手が『こいつ、強え……』って絶望した顔すんのが面白い。自分の思い通りに相手をコントロールして、完膚なきまでに叩きのめす。それが一番の快感だろ」

拓也が少し得意げに話す。

「自分の立てた作戦が、相手にピタッとはまった時が一番楽しいですね。『こう動けば、相手はこう来るはずだ』って読んで、その通りになった瞬間は、パズルが解けたみたいでスッキリします」



海渡が爽やかに語る。

「本気の相手とやっていると、『こいつ、やるな!』ってお互いに思える瞬間かな。勝ち負けも大事やけど、その一瞬一瞬の駆け引きとか、終わった後に『いい勝負やったな』って言い合える関係がええなあって思うわ」  
美緒が言葉を探しながら、ゆっくりと話す。

「えっと……。勝負そのものは、やっぱり苦手なんですけど……。でも、もしチームで試合に出るなら、試合までの間、みんなで励まし合ったり、一緒に練習したりするのは……。楽しい、かも、しません」  
咲が身振りを交えて楽しそうに言う。

「勝負の途中で、誰も予想してなかったようなハプニングが起きるのが楽しいです! どうぶつタワーバトルで、絶対無理だと思って置いたキリンが、なぜかカメの甲羅に引っかかって、すごいタワーができたときとか! 勝ち負けより、そういうのが面白いなって!」

静かに考えていた大輝が、ぼつりと口を開いた。

「……勝負している間、他のことを全部忘れて、それだけに集中できる時間は……。好き、かもしれません」

先生は優しく頷いた。

「みんなそれぞれに『楽しい』と思えるポイントがありそうやね。美緒さんも、『勝負そのもの』ではなくて『それまでの仲間との時間やプロセス』に楽しさを見出してくれたんやな」

先生が特に美緒に優しく語りかけると、美緒は少しはにかみながら、でも自分の気持ちを正確に理解してくれたことが嬉しいという表情で、こくと頷いた。

「……はい」

陽奈や海渡も、先生の言葉に「うんうん」と頷いている。クラス全体が、多様な「楽しさ」の形があることを改めて共有したような、穏やかな空気が流れる。

先生は本題に戻った。

「ほんならここで『僕』の行動について考えていこうか。『僕』の『試合を引き延ばして引き分けに持ち込む』『急にログアウトして、勝敗をつけることから逃げる』っていう行動を受けた対戦相手がみんな自身やったら、この行動に対してどう思う？」

先生がそう問いかけると、生徒たちは、自分が対戦相手だったら……と想像し、次々と顔をしかめた。竜二が嘲笑う。

「はっ、ダッセエな。最後まで戦う根性もねえのかよって思うわ。まあ、相手がビビって逃げたってことだから、俺の勝ちでいいけどな。雑魚はそうやって逃げるしかねえんだよ」

陽奈が憤慨して言う。

「すごいムカつきます！ こっちは本気でやってるのに、すごい失礼じゃないですか？ 最後までちゃんと勝負してほしい！ 逃げるなんて、卑怯です！」  
拓也も続く。

「腹が立つというより、がっかりします。勝負の記録も残らないし、対局後の感想戦もできない。何のために時間をかけて将棋を指したのか、分からなくなります。すごく無駄な時間だったと感じてしまいます」

海渡が少し同情するように言う。

「うーん……もちろん、ええ気はせえへんな。でも、それと同時に『ああ、この人、負けるのがめっちゃくちゃ怖いんやな』って、ちょっと可哀想になるかもしれん。勝負を楽しむ余裕が、今はないんやろなって」

美緒が不安そうに呟く。

「え……私が何か悪いことしちゃったのかなって、不安になります……。相手が

楽しくなかったのかな、とか……。勝負が終わらないのも、なんだか悲しいです……」

咲が不思議そうに首を傾げる。

『あれ？』って思います。どうぶつタワーバトルだったら、途中でいなくなっちゃったら、作りかけのタワーだけが残って『どうなっちゃうんだろう？』って。勝負より、タワーのほうに心配になります！」

大輝が静かに、しかしはつきりと言った。

「……對話が、途中で終わってしまった感じがします。相手が何を考えていたのか、最後まで分からなくなる。……それが、一番気持ち悪いです」

先生は頷き、優しく話す。

「そやんな、良い気はせんよな。みんながさっき考えてくれた『勝負の楽しさ』も途中で途絶えるもんな。そういえば、竜二くん、最初『負ける勝負は時間の無駄、負けそうになったら切る』って言うてくれてたやん？ 相手の気持ちを踏まえてどう思う？ 『だっせえ』とか思われてるかも」

教室の視線が一斉に竜二に集まる。彼は一瞬、意表を突かれたような顔をしたが、すぐにいつもの不遜な表情に戻った。

「……別に。相手がどう思おうが、俺には関係ねえ。だっせえって思いたきゃ、勝手に思っとけばいい。そんなメンタル弱い奴は、どっちみち俺の相手じゃねえかな。そもそも、顔も見えねえネットの相手の気持ちとか、考えてやるだけ無駄だろ」

竜二はそう言って、挑むように先生を見返した。彼の言葉に、陽奈や美緒は少しショックを受けたように目を見開き、拓也は「それは違うだろ」と言いたげに眉をひそめている。海渡は、腕を組んで、何かを考えるように静かに竜二を見つめている。教室に、再びピリリとした緊張が走った。

先生がクラス全体に問いかける。

『「ダサイ」って思うのはメンタル弱いんやろうか」

その問いに、はつきりとした意思が感じられる空気が生まれた。最初に口を開いたのは海渡だった。

「いや、逆やないかな。ちゃんと『それはダサイ』って思えるっていうのは、自分の中にフェアプレーみたいな、しっかりした『ものさし』があるからやと思う。むしろ、そのものさしを無視して、ルールを破ってでも自分だけ勝ちたいって思う方が、精神的には弱いんじゃないかな。負けを認められない弱さ、というか」

続いて、拓也も同意する。

「弱いとは思いません。勝負は、決められたルールの上で成り立つものです。その前提が破られたことに対して、おかしいと感じるのは、正常な感覚です。その感情がなくなったら、そもそも社会が成り立たないと思います」

陽奈も、強く頷く。

「弱くないです！ 全然弱くない！ 相手が卑怯なことしたら、『なにそれ！』って思うのが普通じゃないですか？ そう思わない方がおかしいです！」

三人の意見を聞いて、竜二が舌打ちしながら反論する。

「……いちいち相手の行動に本気でムカついて、感情的になるのが弱いって言うんだよ。本当に強い奴は、相手が逃げようが何しようが、『ふーん』で終わりだろ。気にしてる時点で、そいつと同じレベルってことだ」

美緒、大輝、咲は、発言はしないが、海渡や拓也の意見に頷いたり、竜二の反論に考え込んだりしながら、真剣な表情で議論の行方を見守っている。

先生は静かに竜二を見つめた。

「そやな。僕も、ダサいって思うことや感情的になることが悪いとは思わへん。

だって竜二くん自身もされたら『ダサい』って思うやろ？ いま竜二くんは相

手の感情を考えると自分に自身を重ね合わせてくれたはず。『見えない相手』

じゃなく『竜二くん自身』がそれを『ダサイ』って思ってるってことや」

先生の、静かで、しかし真っ直ぐな言葉が教室に響く。クラスの全員が、固唾をのんで竜二を見ていた。彼は、先生の言葉を聞くと、一瞬「は？」と何か言い返そうとして口を開きかけたが、何も出てこない。

「……っ」

反論の言葉が見つからない。先生に「お前自身が『ダサイ』と思ってる」と、自分の心の内側を、鏡で見せられたように感じたのだろう。竜二は、初めて悔しそうに、そして少しバツが悪そうに、先生からふいと目をそらして、黙り込んでしまった。その様子を、海渡と拓也は「なるほどな……」というように深く頷きながら見つめ、陽奈と美緒は、驚いたように目を見開いている。大輝は、黙り込んだ竜二の横顔を、じっと静かに見ていた。

先生はクラス全体に語りかける。

『もちろん、『他の人がどう思おうか関係ない』ってのは生きていく上でめちゃくちゃ大事なんや。だって、『誰かに嫌われるかもしれない』とか『どう思われちゃうんやろう』とか思いながら生きるのって、めっちゃしんどいやん？ でも

『自分自身はどう思うか』ってのは別や。『他の人がどう思おうが関係ない、でも自分はこの行動をダサイと思う。ダサイ行動はしたくないなあ』って行動を変えていくんや」

先生の言葉は、説教ではなく、静かな独り言のようにも、クラス全体への問いかけのようにも聞こえた。教室は、深い沈黙に包まれている。さっきまで頑なに外を向いていた竜二の視線が、自分の机の上に落ちた。彼は、握りしめた自分の拳を、ただじっと見つめている。先生の言葉が、彼の鎧の内側にある、彼自身の「ものさし」に届いたのかもしれない。

海渡と大輝は、深く頷きながら、強い尊敬の眼差しで先生を見ている。先生が言語化したかった核心を、二人は完全に理解したようだ。拓也も、それが最も合理的で、強い生き方であるとも言うように、納得の表情で聞いている。陽奈や美緒も、ただ「人にどう思われるか」を気にするのは違う、「自分が自分をどう思うか」という新しい考え方に、真剣な表情で向き合っていた。

先生は、改めて陽奈と美緒に視線を向けて語りかける。

「竜二くんを取り上げたけど、この考え方は陽奈さんとか美緒さんにもめちゃくちゃ刺さってくれるんじゃないかなって信じてる。この考えを聞いた今だったら



『負けても申し訳ないとは思わなくていい』 ってのがより一層分かんと思うねん。どうやる？」

二人は、自分たちの心に直接語りかけられているその言葉を、真剣に受け止めていた。先に、陽奈が、大きく一度頷いて、顔を上げた。

「……はい！ なんだか、分かった気がします。負けて『申し訳ない』 っと思うのは、『チームのみんなにどう思われるかな』 って、他の人の目を気にしてたからだったのかも……。でも、自分が『ダサイプレーはしてない、全力でやった』 って胸を張って言えるなら、謝る必要はないんですね。『悔しい！』 っっていう、自分の気持ちだけでいいんだ……！」

続いて、美緒も、吹っ切れたような、穏やかな表情で言った。

『はい、すごくよく分かります。さっき、少し気持ちが楽になった理由が、はつきりしました。『他の人がどう思うか』 じゃなくて、『自分は、自分のこの行動をダサイと思うか』……。そう考えたら、一生懸命やった結果、負けてしまった自分を、自分で『ダサくないよ』 って認めてあげられる気がします。だから、もう『申し訳ない』 って思わなくてもいいんですね』

二人の言葉に、海渡は「そうそう」とでも言うように、優しく微笑んでいる。竜

二は、顔を伏せたままだが、肩の力は少し抜けているように見える。彼もまた、自分以外の生徒に適用された先生の言葉を、自分のこととして聞いているのかもしれない。

先生は優しく頷き、続ける。

『そういうことや。ちよつとだけ脱線するけど、よく『自分がされて嫌なことはするな』ってよく言うやん？ あれって『俺は別に嫌だとは思わないから』っていう反論よく聞くんよ。さっき言うた話やと反論が正しそやん？ でも違うよね。これはいつも僕が言うてる『みんなで気持ちよく過ごせるのが良いね』ってのを思い出してほしい。『じゃあ……、どゆこと？』ってなるやんな。僕はそのよく言われるセリフを変えたこれを掲げるわ。』

『相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし、自分を犠牲にはするな。』

先生が、ゆっくりと、しかし力強くその言葉を紡ぐと、教室は水を打ったように静かになった。生徒たちは、これまで議論してきたこと全てが、その新しい言葉の中に集約されていくのを感じていた。しばらくの沈黙の後、海渡が、深く息を吸い込んで、感嘆の声を漏らした。

「……先生、それ、すごいですね……。『自分がされて嫌なこと』じゃなくて、『相手が嫌がること』ってのが、全然違う。自分の基準じゃなくて、相手の気持ちを想像することが大事なんですね。そして最後の『自分を犠牲にはするな』って言葉があるから、ただの良い人であるんじゃないくて、お互いが本当に気持ちよくいられる、本当の意味での『思いやり』になるんじゃない……。めっちゃくちゃ、しつくりきました」

拓也も、そのルールの完成度に頷いている。

「すごく、分かりやすいです。最初のルールだと、『俺は平気だから』っていう反論ができてしまうけど、先生のルールにはそれがない。それに、『自分を犠牲にはするな』という条件が付いていることで、無理をしなくてすむ。すごく合理的で、現実的なルールだと思います」

美緒は、特に「自分を犠牲にはするな」という言葉に、何かを気づかされたような表情で、静かに先生の言葉を噛み締めている。竜二は、腕を組んだまま、静かに目を閉じていた。

先生は一度区切りを入れた。

「おっしや、今日の授業の内容はこの辺にしとくか。みんなそれぞれに考え方の変

化とか気づきとかがあったと思う。この読み物は次回の授業でも使うから、次回も楽しみにしてて。」

先生が授業の終わりを告げると、生徒たちは「え、もう終わり？」というよう  
な、少し名残惜そうな顔をした。

「ほんなら最後、授業の最初に配ってたワークシートに感想とか考えたことまとめ  
ておいて。自分の中で成長した部分があれば、自信もって僕に自慢してな。ほな  
書いてもらって、書いたら後ろから前に回していつてか。焦らんでいいよ。ゆっ  
くり授業を振り返ってな」

先生の最後の言葉を聞くと、それぞれが静かに頷き、配られていたワークシート  
と鉛筆を手取る。教室には、自分の心の中を覗き込むような、穏やかで真剣な時  
間が流れ始めた。一人、また一人と顔を上げ、書いた紙を後ろから前へと静かに回  
し始める。

「全員分集まったかな。ありがとう。ほんならこの感想は後でゆっくり読ませても  
らうわ。じゃあちょうど時間やな。道德の授業終わります。ありがとうございま  
した」

先生の言葉で、張り詰めていたような、それでいて充実感のある空気がふっと和

らぐ。陽奈が、前回と同じように、でも少しだけ落ち着いた声で、号令をかけた。  
「起立！」

七人の生徒が、静かに、そして一斉に立ち上がる。それぞれが、この一時間で考  
え抜いたことの重みを感じながら、先生に深くお辞儀をした。

「ありがとうございます！」

顔を上げた生徒たちの表情は、少し疲れているようにも見えたが、その目には、  
難しい問題から逃げずに考え抜いた者だけが持つ、静かで強い光が宿っていた。

## おまけ 七人のワークシート①

先生は、集まった七人七色の感想に目を通し、一人ひとりの心に届けるように、青ペンでコメントを書き込んでいく。

### 陽奈のワークシート

今日の授業で一番心に残ったのは、先生が言ってくれた「手抜きと実力不足は違う」という言葉です。負けたときに「申し訳ない」って思うのは、チームのみんなにどう思われるかを気にしていたからだって気づきました。

「私の成長（自慢！）」これからは、もし負けても、自分が全力を出し切ったって言えるなら、「ごめん」じゃなくて「悔しい！」って胸を張って言おうと思います。

先生より

ええやん！ 全力出したら胸張って「悔しい！」って言いな。そっちのほうが周りは気持ちいいと思うし、何よりも陽奈さん自身が楽しめると思うよ！

## 美緒のワークシート

最後の先生の言葉が、お守りみたいに聞こえました。「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし自分を犠牲にはするな。」私は今まで、自分を犠牲にすることが優しさだと思っていたかもしれない。

「私の成長」これからは、相手も自分も気持ちよくいられる優しさを考えたいです。自分を大切にすることも、優しさの一つなんだって思えました。

先生より

そうやな。「氣を遣う」と「優しさ」は別やねん。(また授業で扱う予定。ネタバレごめんね。) 氣遣いは氣を遣うほうも遣われるほうも疲れるの。自分を大事に優しくいこう！

## 拓也のワークシート

主人公の行動は、当初から非合理的だと思っていました。しかし、なぜそれがダメなのかを「相手の気持ち」や「自分の基準」といった言葉で深く考えたことはありませんでした。

「僕の成長」「自分がされて嫌なことはするな」というルールが不完全であるこ

と、そして先生がくれた新しいルール（相手が嫌がることは）が、より論理的で現実的であることに気づけました。物事をより深く、多角的に見る力が少しついたと思います。

先生より

論理的な拓也くんにも刺さったみたいで嬉しい！ 道德って模範解答のない状態で最適解を見つけるようなもの。いろんな視点から見れると判断がしやすくなるね。

## 海渡のワークシート

今日の授業で一番勉強になったのは、先生が竜二に話したことです。俺やったら、たぶん正面から「お前の考えは間違ってる」って言って、真っ向から否定してぶつかってたと思う。でも先生は、竜二自身の言葉を使って、本人に考えさせた。

「俺の成長（自慢）」相手を否定するんやなくて、相手の中にすでにある「ものさし」に気づかせてあげることが、本当の意味で人を変える力になるんやなくて学びました。



先生より

読み物じゃなくて授業から学んでくれたんやな！ 僕が怒るとかぶつかってのが苦手な性格なだけかもしれへんけどね。授業も人との関わりやから、気持ちよく楽しくいきたいね。

### 咲のワークシート

ネットの将棋の話だったけど、私はどうぶつタワーバトルのことをずっと考えていました。途中で相手がいなくなったら、作りかけのタワーが残って可哀想だなって思いました。

『私の成長』 ネットの向こうにも、私と同じようにタワーを作ってる人がいるんだって、当たり前のことだけど、初めてちゃんと想像できた気がします。これからは、相手がいることを忘れないようにしたいです。

先生より

画面の向こうにいる相手の存在、大事やね。タワーだけじゃなく、タワーの向こう側にいる人のことも想像しながらタワーをつくると、より楽しくなるかもね！

## 竜二のワークシート

「成長した部分？」知らねえ。けど、先生が言ってた「他の奴がどう思うかは関係ない。でも、自分自身が自分の行動をダサイと思うかは別の話」ってやつ。……あれは、まあ……ムカつくけど、違うとは言えねえなと思った。これからは、人にどう見られるかじゃなくて、俺が俺のやったことを「ダサイ」って思わねえかどうか、考えてやる。……それだけだ。

先生より

ええやん。かつこええ。明らかに成長しとるよ。相手にどう思われるか、じゃなくて、自分がどう思うか。次回以降の授業でも竜二くんの「カッコいいところ」見してな！

## 大輝のワークシート

僕が今まで、なんとなく心の中で感じていたことが、先生の言葉ではっきりと形になりました。「人と勝負するより、できなかったことができるようになることが気になる」という僕の気持ちは、「自分のものさし」を大事にしていたからだと分かりました。

「僕の成長」先生が最後にくれた「相手が嫌がることはするな。温かい気持ちになることをやれ。ただし自分を犠牲にはするな。」という三つのルールは、僕がこれから生きていく上での、完璧な道しるべになると思います。ありがとうございます。

先生より

大輝くんはすでにちゃんと自分の気持ちを大切にしていたんだよ。心をうまく言語化できるか分からへんけど、これからもなるべく分かりやすい言葉にしていこうと思うわ。ありがとう！